

ベトナム、黒タイの「亀の甲」型の家

樫永真佐夫

国立民族学博物館

本稿は、ベトナム西北地方の黒タイ村落で行われたフィールドワークに基づく記録である。従来の民族誌は、しばしば黒タイの「亀の甲」型家屋を黒タイの伝統的家屋として記述してきた。しかし、近年、もはや黒タイ村落で亀の甲型家屋を見ることはできなくなった。本稿では、1990年代後半の「亀の甲」型家屋の解体と、新しい形態の高床家屋の建築に焦点を当てる。そこから、住まい方、建築の技法の変化、情報化、資源へのアクセスなど、さまざまな要因によって、家屋をめぐる伝統が、ずっと変化してきたことを示す。

はじめに

「世界の屋根」の庇は、東南に長くのびて、雲南南部、インドシナ北部にかぶさる。そこまでくると、高山も切れ切れになり、すきまに大小の盆地が出現する。盆地に生活基盤を置いているのは、しばしばタイ語系の諸民族である。紅河以西のベトナム北部も例に漏れない。黒タイ、白タイなど、ベトナムでターイ (Thái) として総称されるタイ語系民族が、500年以上にわたって、諸盆地を灌漑し、水田を拓いてきた。

ディエンビエン省トゥアンザオは、標高1000～2000メートルの山に取り囲まれた標高約600メートルの盆地である。川沿いに敷き詰められた田んぼが、ちょうど山にぶつかった斜面に、黒タイの村はある。等高線に沿って、棟の向きが揃った、大きな木造の高床家屋が、列をなして並んでいる村の景観は、実に行儀よく、均整がとれている (写真1)。

私はこれを美観と思うが、村の美観には、理由がある。一つは、各家内部の構造と配置をめぐって、明確な規則があり、それが守られているからである。次に、尺のせいもあり、柱の間隔や屋根の高さなどに統一性が高いからである。それから、設計者が限られているゆえに、建築時期によって、家屋の形態がいくつかに類型化され、バリエーションが限られているからである。

これまでも民族建築学者は、東南アジア諸民族の木造高床家屋をしばしば扱ってきた。それらはしばしば、「○○という民族 (あるいは地方集団) は○○な形態の家屋」として、民族や地方集団ご

とに家屋の形態を類型化して記述することで成果を上げてきた^{注1)}。しかし、ある民族や集団の家屋がどのように変化してきたのか、建築や解体する人々の行動、人々の住まい方、外部社会の影響などを視野に入れて記述した研究は少なかった^{注2)}。

私が知る限り、黒タイの家も過去50年間だけを見ても、変化している。従来、黒タイの伝統的な家は、亀の甲のように、中央が盛り上がった楕円形の屋根を特徴とすると、研究者、現地の人々の間で語られてきた。しかし、現在、そうした丸い屋根の家は、ディエンビエン省、ソンラー省付近で見ることができない。私が知る限り、2003年頃を最後に、解体され尽くしたのではなかろうか。私が調査してきたトゥアンザオ県の村では、1998年に最後の「亀の甲」型の家が解体された。本稿では、黒タイのいわゆる伝統的な「亀の甲」型の家解体、改築に焦点を当て、黒タイの伝統とされる高床家屋の変化を論じてみたい。

調査地について

まず調査地の背景を概観しておこう。

ベトナム社会主義共和国は、54の民族を公定している多民族国家である。1999年の人口調査によると、総人口7600万人の86%を多数民族キン族 (ベト族) が占め、残りの14%が53の少数民族である。一見、いかにも少数民族は少数である。しかし、ベトナムは、キン族による歴代ベトナム王朝の興亡の主な舞台である紅河デルタという、1平方キロあたり人口密度1000人をこえる世界的な超人口稠密地域を擁していて、東南アジ

アでインドネシアに次ぐ人口大国である。実は、少数民族人口だけで1000万人をこえ、隣国ラオスの総人口580万人^{注3)}をはるかに凌ぐ。

少数民族の中で、もっとも人口が多いのが、紅河以東の平地、丘陵地を中心に約148万人居住する、タイ語系のタイ（Tây）である。次いで多いのが、西北地方の諸盆地に居住するターイで、人口133万人である（1999年人口調査）。

ターイは、黒タイ、白タイをはじめとするいくつかの地方集団に分かれる。黒タイと白タイは、しばしば居住する盆地がちがっている。たとえば、黒タイが集中的に居住しているのは、ギアロ、イエンチャウ、マイソン、ソンラー、トゥアンチャウ、トゥアンザオ、ディエンビエンを中心とする諸盆地である。これに対して、白タイは、ライチャウ、フォントー、タンウエン、クインニヤイ、フーイエン、モクチャウ、マイチャウをはじめとする諸盆地である（図1）。また、女性の上着の形、既婚女性の髷、家屋内部の配置と構造、祖先祭祀の日などにも違いがあり、彼ら自身、自分が白タイか、黒タイかをはっきりと認識している。

しかも、地域を越えて、黒タイ文化の均質性が高い点が、白タイとの違いでもある。このことは神話的伝承にも表れている。たとえば、イエンチャウの黒タイを例外として、一般的に黒タイは、亡くなったあと、ギアロにあるナム・トック・タツ

トの沢から天上に昇ると考えている。一方で、白タイはそのような伝承をもたず、地域ごとに魂の行方は異なっている。更に、黒タイにかぎって、始祖的な英雄ラン・チュオンに関する伝承を継承していて、実はラン・チュオンの征戦経路と現在の黒タイの居住地域がかなり重なっている。

私は、トゥアンザオの盆地にある黒タイ村落で1997年以来、現地調査を行ってきた。ベトナムは、中国やラオスと同様に、外国人が現地調査の許可を役所から得るのは、手続きが煩瑣で時間もかかるうえ、困難である。しかし、1999年頃までは、町の中心部にあるゲストハウスに寝泊まりして村に通うという名目で、実際にはかなり住み込みに近い形で調査できた。今にして思うと、運がよかった。

ベトナム語も片言しかできない上、黒タイ語は全くできないまま、後述するA村での現地調査は始まった。最初に村人との信頼関係を築くためにしたこと、それが、家の解体と建築の手伝いだった。最初に解体を手伝った家が、黒タイの伝統的家屋の代表とされている「亀の甲」型の家であった。1998年秋には、A村で最後の「亀の甲」型の家が解体された。以来10年の間に、ベトナムの黒タイのどの村からも「亀の甲」型の家は消えた。本稿の記述は、1999年に執筆した拙稿とデータが重複するが²⁾、1997～1998年の家屋解体を

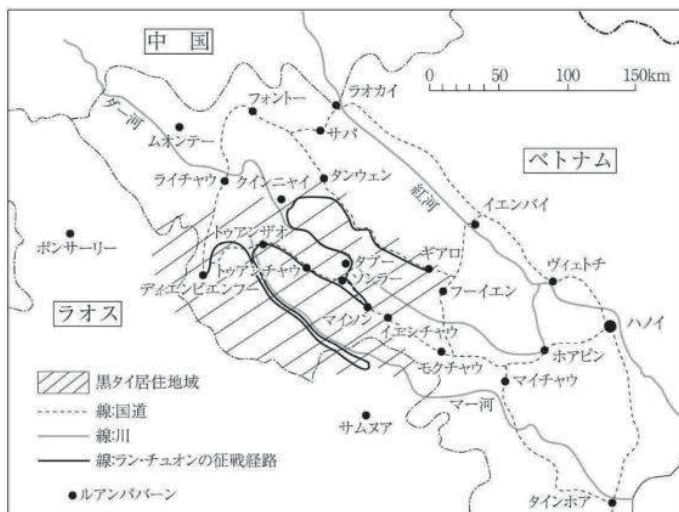


図1 ベトナム西北部黒タイ関連地図；樫永¹⁾ p.10



写真1 黒タイ村落の景観



写真2 「亀の甲」型の家

めぐる思い出語りも含め、伝統家屋の変化の要因について考えてみたい。

黒タイと亀

本稿の記述の中心は、トゥアンザオ県にある人口約350人、約50世帯からなるA村である。小学校教員、村の幹部、退役軍人などがいるために、月毎に現金収入がある世帯もあるが、全世帯が水田を耕作し、山地斜面に焼畑を拓き、菜園で野菜を作り、家畜を飼養して、日常的な食料を自給している。村の規模、生活水準ともに県で平均的な黒タイ村落である。

この村では1997年当時、アウ氏宅がもっとも古い「亀の甲」型の茅葺きの家であった(写真2)。「亀の甲」型は1970年頃までの一般的な屋根の形で、A村には既に3戸しか残っていなかった。この形の屋根を黒タイ語でトゥップ・コン (*tup cong*) と呼ぶ。直訳すれば太鼓屋根である。これに対して、真上から見下ろすと長方形の、入母屋の屋根をトゥップ・ダット (*tup dat*) と呼ぶ。ライチャウをはじめとする白タイの家の屋根は、伝統的にトゥップ・ダットである。

私はトゥップ・コンの屋根を「亀の甲」型と呼んでいるが、これは私の個人的な印象ではない。実際に、村の人たちがトゥップ・コンを亀の甲みたいとしばしば形容するのである。しかも、それは、神代の亀と黒タイにまつわる伝承とも関連している。



写真3 サウ・への柱の上にある亀の甲の飾り

造物主テン (*Then*) が人、動物、植物を作った。ある日テンの死が伝えられた。そこで動物達と植物達が先にテンを弔問した。遅れて人間が行く途中、亀が倒木に道を阻まれて困っているのを見て、亀を脇にかかえて木を越えさせてやった。人の脇が臭いのは、そのときに亀の糞の臭いが付いたからである^{注4)}。一方、亀はその恩返しに実はテンはまだ死んでいないことを人間に打ち明けた。

テンは雨、日、山、川、四季を地上にもたらすので、人間は大いにその恩恵に預かっていた。しかもテンが本当は生きていることを人間は亀に教えられて知っていたので、哭して悲しんで見せた。一方、動物や植物達はテンの死を悲しまなかった。だから人間が動物を食べ、動物たちを統べることになった。また人間は亀のことを記念して、家の建築に際して亀の甲羅のある柱に儀礼的に括り付けるようになった。しかもその家の屋根の形は亀の甲型である。テンは自分の死を悲しまなかった動物に怒り打擲した。だから梟の嘴は曲がっているのである³⁾。

亀の甲羅は、サウ・ヘ (*xa hek*) と呼ばれる柱に吊す。現在のトゥアンザオで、亀の甲羅がサウ・ヘにあるのを見たことがないが、トゥアンチャウでは2002年に見た。トゥアンザオでこの慣行が廃れた大きな理由は、1980年代に、中国向けの漢方の材料や食材として亀が乱獲されなくなったからだという。確かに、西北地方の池や淵で、野生の亀を私は見たことがない。

さて、サウ・ヘは、掘っ立て式の家を建築していた1960年代以前、最初に地中に立てた柱であった。サウ・ヘを地中に立てるとき次のような儀礼が行われた。

まずサウ・ヘの下で次の2つのものを作る。一つは、クズショウガの葉にくるんだ粃米を一包み、もう一つは、綿花の種子を同じくクズショウガの葉にくるんだ一包みである。この2つをサウ・ヘに吊したあと、サウ・ヘの先端には竹で編んだ袋をかぶせる。更にこの袋に亀の甲羅をかける。男根を象った木彫りの呪物を掛けることもある。亀の甲羅がなければ、木で模したものを作って掛けた^{注5)} (写真3)。

これを掛けるのは、ルン・ター (*lung ta*) という親族カテゴリーに属する男性である。ルン・ターは妻の兄弟や母の兄弟など姻族である。マイソンの黒タイ首領末裔にあたる故カム・チョン先生 (1934-2007) の解釈に従うと、米の粃、綿花の種子、男根はそれぞれ食物、衣類、親族の再生産を象徴している。ルン・ターがこの役割を担うのは、姻族が血族に「米と布と子ども」を与えるから、つまり姻族のおかげで食、衣、家族の再生産が可能になるからという考えに基づくという。

掘っ立て建築の際、サウ・ヘの次には、サウ・ホン (*xau hong*) という柱がたてられた。この柱が、家内祭祀空間である「家霊の間」と、必ずそれに隣接する家長夫婦の寢床の境界をなす。

サウ・ホンも、ルン・ターによってたてられると決まっているが、このとき人間の背丈の半分くらいの高さの位置に穿った穴に、銀のコイン (しばしば仏領インドシナのピアストルコイン) や貴金属を入れる。カム・チョン先生解釈では、銀のコインも生産のシンボルだという。さらにサウ・ホンの床上部分に打ちつけた楔には、次の3つものを吊した。刀と、長い上着と、「生命の護符 (*khut xanh*)」を入れた木綿の袋である。「生命の護符」は多いときには60くらいもあった。サウ・ホンの隣が家長夫婦の寢床であり、これら3種のもの、家族の者でもむやみに近づけないように、家長の枕元近くにおかれていた。しかし、サウ・ホンに関わるこの慣行は、現在確認することはできない。

亀の甲型家屋の構造

トゥアンザオにおける黒タイ村落の家の構法は、1960年代からキン族の建築様式の影響を受けて、大きく変わった。1960年代というと、ベトナム民主共和国 (1945-1975) 下に置かれた当地でも、封建的遺習の撤廃と銘打たれた風俗改変、社会主義政策に基づく農業集団化など、共産党主導の社会と文化の変革が進む時期である。この時期に、掘っ立て柱による家屋が減り、柱の下に礎石を置くのが一般化した。

縦の列の柱だけを梁で連結し、将棋の駒形にした枳を、寝かせた状態で作っておいて、それを水牛の革を割いた太縄を結んで人力で引っ張って立ちあげる。その後、横方向の梁、桁、棟木を渡して家の架構を作り上げるようになった。当然、サウ・ヘを最初にたてるわけではなくなった。同時に、サウ・ヘやサウ・ホンにまつわる儀礼も廃れた。

1997年当時でも、すでに掘っ立て柱の家はA村になかった。ベトナム戦争中に上空から見える人工物が徹底的に爆撃されたせいで、村で一番古い家屋が1970年頃に建築されたアウ氏 (当時72歳) の家であった。1997年秋に、私はアウ氏の家の解体に直接立ち会ったが、アウ氏の家も「亀

の甲」型の家であったが、礎石をおく構法であった。構法が変わっても、どの柱がサウ・ヘであり、サウ・ホンであるかは認識され続けている。それが住まい方と関連しているからである。

山麓に沿って建てられる黒タイの家の内部は、田んぼや川がある側に面した「下側」と山側の「上側」、更には祖先を祀る「家霊の間」がある「クワン側」と炊事洗濯のテラスがある「チャン側」という2方向から区分される。日常生活の中で、下側と上側は、それぞれ「夜の領域」と「昼間の領域」であり、クワン側とチャン側は、「公的領域」と私的（家族の）領域あるいは「男性の領域」と女性の領域」として用いられている。

図2のアウト氏宅の場合、中央を境にして、境にして左がクワンで右がチャンである。女性たちが炊事、洗濯、染め物を行うのはチャン側のテラスであり、家族や村人はチャン側のテラスからふだん出入りする。一方、クワン側の梯子は、公的な用事で訪れる客や、ルン・ター（姻族）を招き入れる場合に用いられる。クワン側にある囲炉裏も、客人のためのもので、家族の食事はチャン側で行われるのに対して、客人を招いての食事はクワン側で行われる。普段は、クワン側のベランダで、アウト氏が竹細工の籠や筵などを作ったり、網を編んだりしてする。

上側（山側）の一方の端に「家霊の間」がある。「家霊の間」は、亡くなった父系祖先のための部屋である。亡くなって、天上世界にのぼった祖先を、10日に一度お供えをしてここに招く。このお供えをパット・トンという。その際、米、肉、

酒などをお供えする。肉は、魚か鶏かブタか水牛の肉で、鶏卵でもいい。また、結婚や新築などのお祝い事、葬式、新年のお祝いなどにも、お供えをし祈禱する。

パット・トンのお供え等のため「家霊の間」に入室できるのは、世帯の家長男性の直系子孫のうち男性と未婚女性に限られる。家長の妻を含め、婚入してきた女性はすぐに「家霊の間」に入れない。婚入してきた妻も、亡くなると、その家の「家霊の間」で祀られることになる。しかし、結婚後数十年経って、婚入前の父系出自との関わりを完全に断ち切る儀礼をすませたあと、ようやく妻は祭祀権を得、「家霊の間」に入室できるようになる。

この「家霊の間」への入室資格は非常に厳格である。たとえば子供同士が家の中でボール遊びをしていてうっかりボールが入ってしまった場合でも、その家の子供なら入ってボールを取っていいが、でなければ決して入れない。もし何かの理由でその家の子がその場にいなければ、だれか「家霊の間」に入室する資格のある者を子供たちは呼びに行くのである。しかも、他の家の「家霊の間」に決して入ってはいけないという規範の厳格さを5～6歳にもなると既に身につけている。

なお、「家霊の間」の壁の上の方には、タイと呼ばれる護符が吊されている。家族に男の子が生まれる度ごとに吊すのである。だから、タイの数を数えれば、その家で生まれた男性の数を数えることができる。一方、女の子が生まれた場合、ホと呼ばれる護符を台所近くの天上近くに吊す。

なお、サウ・ホンを境にして、家長夫婦の寝床が接している。山側沿いの寝床には、黒い蚊帳が並び、蚊帳一つ一つが簡便な部屋のようにになっている。チャン方向に近づくにしたがって、年の若い夫婦、未婚の者たちが眠る蚊帳である。

「亀の甲」型の家解体

私は、1997年10月に村に来て、水田の収穫に立ち会い、11月にはアウト氏宅の新築に立ち会うことになった。これは、村人の生産暦に照合すれば偶然ではない。家の改築は陽暦11月頃、稲の収穫が一段落した農閑期に行われるか、テト前後の陽暦1～2月頃に行われる。ただし、陽暦12月頃はしばしば家の改築を避ける。その頃は、やや気候が不安定で、夕立と雷が時としてやってくる

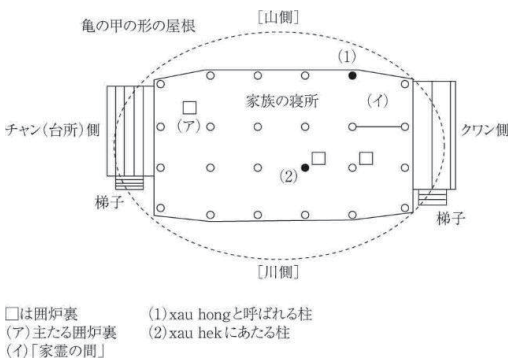


図2 「亀の甲」型の家の中；櫻永¹⁾ p.122

る。家の棟上げ前に雷が鳴ると人が死ぬと言って、村人が雷を忌むからである。

アウ氏宅の床下では、農業の合間を見て、40歳に近いアウ氏の次男ナオ氏やその兄弟、姉妹の夫たちが組になって大鋸で丸太を挽いていた。床下には、薄く挽き割られた板材や、樹皮を剥ぎ、鉋がけをした丸太が1年かけて、すでに集められ蓄えられていた。それが新築される家の床板、壁板、柱の材料であった。

しかし、私は残念ながら、アウ氏宅の解体には立ち会えなかった。村長に招かれて食べた牛の生肉に当たったせいか、ひどい下痢のために町で七転八倒していたからである。従って、ここから記述するのは、アウ氏宅とほぼ同じ時期に建ち、規模も構造もほぼ同じだったニエト氏宅が、翌1998年11月に解体されたときの模様である。

村に専門の大工はいない。主に親族の繋がりから集まった者たちが、それぞれ得意分野の作業を分担する。市場規格に従って製材された木材を用いるのではなく、山から伐り出した木材それぞれの弾みと堅さの特質を生かして、家を解体し或いは作り上げていく。電気もない上に、道具といえばノミ、ツチ、カンナ、大鋸、マガリカネ、墨縄くらいしかなく、釘もほとんど用いない。それでも、2週間ほどで立派な高床家屋は建つのである。

さて、家の解体は、家霊への報告なしに済まされない。家の解体は、陰暦14日と23日を忌んで避け、あらかじめ呪術師に選定してもらった吉日に行われる。

まず家長が「家霊の間」にピンロウジの葉、キンマの実、石灰を皿に載せて供える。これをしないとバチが当たって家長が病気になると言われる。こうして、家霊に作業開始を知らせ、いったん天にお戻りいただくのである。

明け方のまだ霧が濃い中で、作業は始まる。家財道具を家の外に運び出す。それから「家霊の間」からお供えのピンロウジやら載った皿を家長が運び出す。これが形式上の作業開始の合図であると考えていい。運び出されたものは、あらかじめ、敷地のかたわらにたてておいた差し掛け小屋に移される。その差し掛け小屋が、新居が立つまでの家族の仮の宿であり、荷物の保管所であり、工事に携わるものが一服したり、食事する場所である。

壁を外し、屋根の茅を取り除き、次いで床をは

がす。こうして架構がむきだしの丸裸になるまで、1時間ほどである（写真4）。山側から望むと、さながら入り江に停泊する無骨な軍艦を見おろすが如き壮観さであった。身軽な男たちがマストの上で勇猛果敢に働いている。各支柱を結んでいる梁や棟がはずされ、楔が打ち抜かれ、綱を使って力を合わせて柱が倒されていく。完全に家が分解されるまで、約2時間ほどであった。

これらは皆男性の作業である。女性は解体終了後に行う宴会の準備のために煮炊きしたり、あるいは古材の整理に忙しい。チャム・ニャーと呼ばれる茅葺き屋根の材料は、まだ損傷が少なければ新居を葺くためにとって置かれ、傷んだものは捨てられたり、集めて便所小屋の屋根や壁を葺くのに用いられたりする。解体された柱も別の所に移され、虫食いや腐食の少ないものは柱の表面だけ削って新居の柱としてそのまま利用されることもあるが、おおかたは砕いて薪にされる。どの程度再利用するかは、柱の傷み具合にもよるし、経済的事情にもよる。いい柱は一本あたり日本円にして6千円前後、小学生の子供1年にかかる教育費6人分におよそ等しい。

家の新築

ここで、ふたたび1年を遡って、解体された後のアウ氏宅の新築の話しよう。

下痢が治まって村に戻ったのは、アウ氏の家が解体された2日後だった。すでに「亀の甲」型の家があった場所は、すっかりサラ地になって、うす黄色い地面がむき出ししていた。主に若い男女がクワとシャベルを使って固い古い表土を崩している。崩した土石の固まりは、立て板を2、3人がかりで地曳きして斜面からなだれ落とす。こうして新しい地面を露出させ、かつ土地を水平にするのである。立て板の上には重石として子供数人がのっかることもあるので、これを曳くのは並大抵でない。重い台車をひく姿勢で把手を握り、おでこを地面に打ちつけるつもりで前傾し、腰と背中に渾身の力をこめて前進する。他の人たちは、柱にノミで穴を穿ったり、カンナで表面を削ったり、あるいは、お茶を飲んだりタバコを吸ったりして一服している。

だいたい毎日、家の建築に参加するのは、アウ氏の息子たちと娘の夫たち5、6人と、村内にい



写真4 「亀の甲」型の家の解体



写真5 棟上げの様子

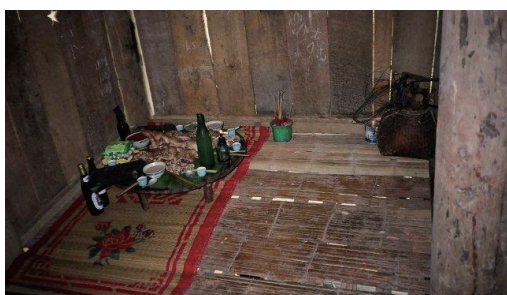


写真6 棟上げの日の「家霊の間」のお供え

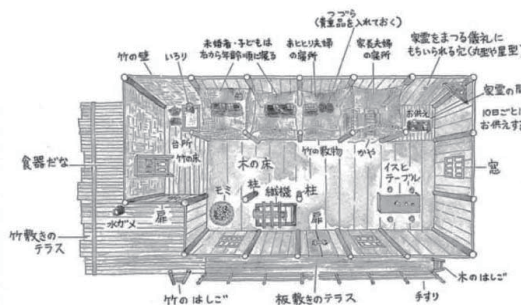


図3 新築されたアウ氏宅の中 (イラスト:栗岡奈美恵); 樫永¹⁾ 風響社 p.123

る他の親族たちである。入れ替わり立ち替わり、常に10人あまりが働いている。アウ氏と同居しているナオ氏が、改築が済むまで全員の昼食と夕食の肉代、酒代を持ち、さらにタバコやお茶を準備しないとイケないので、それが10人以上となると、結構な出費である。ある日の買い物、タバコ1カートン(1万7千ドン)、お茶1袋(6千ドン)、豆腐5キロ(1万3千ドン)、豚肉3キロ(3万6千ドン)、野菜2キロ(2千ドン)であった。これを円換算すると約700から800円くらい、改築に普通2週間かかるので総額1万円前後の出費となる。水牛1頭で2~3万円という値段からしても村人にとっては痛手である。

家を解体して6日目、まず台所小屋が建てられることになった。「亀の甲」型の家には、台所小屋などなかった。しかし、1980年代から多く建てられるようになったトップ・ダット型の屋根の家では、囲炉裏がある台所小屋が主屋に連結し、その外に台所のテラスがある形態の家になった。

これは茅葺きから瓦葺きという変化とも関わっている。茅葺きの家の場合、囲炉裏が中央にない

と茅が燻されず、虫が付きやすく、茅の腐食、損傷も早い。一方、瓦葺きだと囲炉裏が中央にあると、逆に煙が逃げにくく家の中が煙って暑くなる。そこで台所小屋は茅葺きで、主屋と連結させた形態の家が生まれた。1980年代以降は、このタイプの家が圧倒的に主流である。このように、時期ごとに建築の形態が似かよっているのは、近隣数か村の家の設計をする人がほぼ一人だからである。

まず、柱の縦の列を梁でつないで、将棋の駒形の枠を作る。それを水牛の革綱で引っ張って立ち上げ、また次のを立ち上げると、横の梁で固定する。これを繰り返して、棟でつないで全体の架構を作り上げる。次にたるきを渡して屋根を作り、柱を「てこの原理」で持ち上げて下に礎石を入れる。それから竹ひごを用いて茅屋根を葺いて、おおかた完成する。ここまで完成させるのに、ある日の午後と翌日の午前中がつぶれた。床掃除をした後は、差し掛け小屋にあった荷物を運び込み、ここ

で昼食である。

その日、村には他に2軒建築中の家があったので、この日の労働に参加したのは私を含めて7人であった。畳にして5～6畳ほどであろうか、台所小屋の上に女性や子供を含めて10人以上がのっかると、ずいぶん狭い。しかしとにかく梯子で宙に浮いたその小部屋によじ登る。アウ氏の音頭で酒を酌み交わし、豆腐、肉、野菜スープ、餅米を食べた。列席したのは、ナオ氏を含むアウ氏の息子が3人と、親族集団は異なるが同村でナオ氏と仲のいいニャー氏、アウ氏の甥に当たるヌック氏とグア氏（いずれも従兄弟同士で、アウ氏の兄の息子にあたる）そして私とアウ氏である。うち4人は他村の者であるとはいえ、アウ氏と近い親族であり家も数キロ以内と近い。

酒を飲まないナオ氏のことなので、最初の乾杯と御飯を食べる前の乾杯では形式通り飲み干すことを勧めても、2時間も3時間も酒を酌み交わすことはない。1時間もしないうちにお開きにして、午睡して2時頃また再開ということになった。ニャー氏など近所の者は一度昼寝しに帰宅するが、残った者たちは宴席を片づけて布団を敷き皆くつつきあって雑魚寝する。私も横になるが、女性達は台所小屋の上や下で食事の後かたづけやら、荷物を運び込むのやりに動き回っていた。その日の午後から棟上げまでのちょうど1週間、柱にはほぞ穴を開け、柱同士を縦の梁で結んで将棋の駒形に枠づくりをする作業が続いた。

棟上げまで私は毎日大工仕事を手伝い、アウ氏の家族と寝食を共にし、台所小屋の中で寝た。風を遮るものがないので、家族が身を寄せあって布団を被る。汗の臭いが染み込んだ布団や枕の中で、ナオ氏の15歳になる息子グアツが私の腕にしがみついて来る。窮屈だけれど親しみの表現を拒むわけにもいかず、そのまま秋の星空を眺めていると、それはそれで贅沢な気分になる。

棟上げと新築祝い

一番鶏が鳴き、そのうちにブタやニワトリがたまびすしくなる。やがて皆起きだして小便をしたり、洗顔、水汲みに出かける。棟上げの日も、いつもと変わらず、そんな風に一日が始まる。

11月下旬の朝は霧が降りて寒い。本来なら囲炉裏に薪をくべて温もるのだが、まだ囲炉裏を据

えていないので、地べたに煉瓦で五徳を組んで火を起こす。たいがい最初に起きたナオ氏の妻ムンさんが火を起こす。私は起きると真っ先に火に近寄りお湯を沸かす。その湯でアウ氏が、自家栽培のコーヒーを淹れて飲む。そうしているうちに棟上げに参加する人たち、20人が集まった。

家の解体とちょうど逆の手順の作業が、やはり夜明け頃の早朝に始まり、昼までには礎石が柱の下に入れられた。それから梯子をつけ、床板と壁板をはめ込んでいき、竹ひごで固定したり、釘で打ちつけていく。掘っ立て式の家では、竹編みの壁だったので、すべて竹ひごでも固定できたが、大鋸で製材された板を用いるようになり、釘を打ちつけて固定するようになった。アウ氏の主屋は、床と壁の多くが板なのでやはり釘が多用されている。

棟上げをすると、まず「家霊の間」にお供えをして家霊を再び招き入れ、報告する（写真5、6）。それから棟上げに参加した人のために宴会が催される。新築祝いが開催されるのは、家がほぼ完成してからであり、アウ氏宅の場合、棟上げの3日後であった。

新築祝いの宴会は、昼前には始まる。だから、その日は朝から女性達は食事の準備に追われている。「家霊の間」には朝からお供えがなされている。10時半頃から人が集まり始め、グアツやアウ氏の娘ムコのモンが渡り廊下で太鼓を叩いて祝い事を知らせる。新築祝いの宴会への出席は誰も拒絶されない。逆に、新築祝いにどれだけの人が来てくれるかというのが、家族にとって家族の評判と信望を示すバロメーターとして重要である。また参加者を見れば、普段のつきあいの範囲が大体分かる。アウ氏宅の場合、近村の者も含め90人近くがやってきた。新築祝いの宴会としては比較的多い方である。酒が嫌いで宴会には常に背を向けているナオ氏もこれにはご機嫌であった。

主宴の席次を見ると、クワン側（家霊の間側）とチャン側（台所側）という2方向の対立が、「男性の領域」と「女性の領域」という空間認識と結びついていることはすでに述べたが、これは、宴会の席次にも明確に現れる。また山側と川側という対立で見れば、年長者が山側で若年者が川側という違いも浮き彫りになる。家の形態はやや変わったが、内部の空間の使い方は維持されている

のである。

新築祝いの宴会は2日間続く。私は昼過ぎには酔っぱらって逃げ出し、よその家で昼寝していたが、日が暮れて戻っても一番奥の宴席では老人達の酒宴がつづいていた。夜が更けると若者達が集まってきて、天秤棒で床をならし太鼓を叩いて酒を浴びながら輪になって踊る。人が入れ替わり立ち替わり、宴会は明け方まで続く。

伝統家屋の変化

黒タイの伝統家屋は木造高床式だとされる。衣食住がベトナム化（キン化）したり、言語のベトナム語化も進みつつあるが、それでもキン族に倣って土間式の家を建てたがる村人は珍しい。土間式の家を建てるのは、だいたい経済的に貧しくて、高床家屋を建てるだけの柱を準備できない家族である。床下は家畜や貯蔵庫、床上は人の住む世界、天は精霊の世界、という、家をめぐる伝統的な3層構造的な理解は維持されている。

とはいえ、これまで見てきたように1960年代以降だけを見ても変化が多い。まず素材と技術の変化がある。礎石の導入は、瓦の導入をもたらした。加えて、竹を割いて開いた簧の子から、板材へと床板が変化し、釘が不可欠になった。

素材の変化は、構造の変化をもたらした。礎石の導入は、大規模な家屋の建築、及び瓦葺きを可能にした。具体的には、1960年代以前の掘立て式では、フォン・タン・クー型の家屋（図4）であったが、礎石を導入するようになって、フォン・トー・キー型の家屋（図5）が出現した。アウ氏の新宅でいえば、台所小屋はフォン・タン・クー型で、主屋はフォン・トー・キー型である。建築材の組み方に根本的な技法上の変化があったわけではないが、柱と梁の構造が複雑化して、大型化、重量化したのである。さらに瓦葺きの導入は、囲炉裏を移動させ、台所小屋を建てさせた。

素材の変化と平行して、技術的な知識も変化する。茅葺き屋根の素材を例にすると、チャム・ニャーからチャム・チョンへ、という茅の編み方にも変化が起きた。茅葺き屋根の減少、茅資源の減少という生態環境の変化とも相まって、茅がたくさん必要なチャム・チョンが用いられなくなった。それに伴い、その作り方を知る者も60歳以上の人に限定されている。逆に、1960年代以降は、

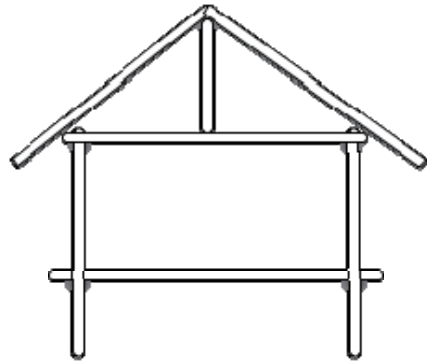


図4 フォン・タン・クーの構法

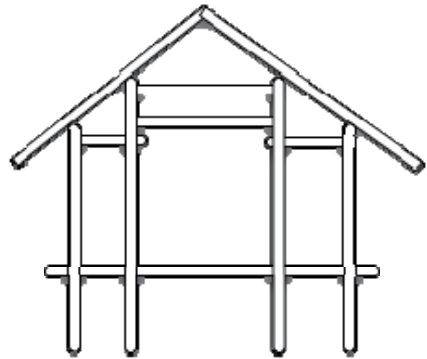


図5 フォン・トン・キーの構法

礎石の入れ方、フォン・トー・キー型家屋の組み方などに関して、新しい技術や知識が導入されたことは間違いない。

こうした諸変化は、しばしば社会の変化とも関わっている。例えば黒タイの家屋の場合も、礎石の導入はキン族との接触によってもたらされた、と村人が言う。また、大工道具は、キン族や漢族が用いるものと同じであった。また大工道具の語彙を比較すると、「大鋸」が黒タイ語でもベトナム語でもクア（漢字で「鋸」）、定規は黒タイ語でトゥアッ、ベトナム語でトゥアック（「尺」）、鉋は黒タイ語でパオ、ベトナム語でバオ（「鉋」）、と類似していて、ベトナム語、黒タイ語ともに漢語起源と考えていい。さらに尺は、身体尺のみならず、正確さが要求される場合、中国尺が用いら

れる。中越紛争が起きる1979年まで、トゥアンザオにも町には中国商人がいたが、黒タイの伝統家屋建築にも、漢族による影響を無視することはできないであろう。

おわりに

本稿でも述べてきたように、黒タイの家はこの半世紀の間に、掘っ立て式のフォン・タン・クー型の家から、礎石の上に立てるフォン・トー・キー型の家が変わった。また、黒タイの伝統的な「亀の甲」型の家は、すでに見られなくなった。今やトゥップ・ダットの家屋が普通である。

その変化の一方、どの柱がサウ・ヘ、サウ・ホンかという人々の認識は継承されている。また、屋内が山側と川側、チャン側とクワン側の二方向に沿って区分され、その利用が異なっている点も、かなり維持されている。とはいえ、サウ・ヘ、サウ・ホンという柱にまつわる儀礼的慣行は廃れつつある。

伝統という言葉には、人々が繰り返し行為する中で引き起こされる変化や革新を、包み隠してしまう響きがある。しかし、人々は生活環境の変化に応じて、外部のものを新しく取り入れたり、古いものを止めたりを不断に行っている。今後も黒タイの家の形態は、建築をめぐる協働関係、木材の値段、生業、地域の情報環境、家族・親族関係、家霊のような超自然的存在との関わりなどの変化に伴い、変化し続けることであろう。そうした変化の中で何を伝統と呼ぶかも、再解釈され続けていく。実際、山麓沿いに、「亀の甲」型ではなく、トゥップ・ダットの高床家屋が軒を連ねている村の景観が、この数十年の間に、典型的な伝統村落の景観として考えられるようになってきているのである。

注

- 1) 川島⁴⁾をはじめとして、民族建築学的なすぐれた研究は多い。
- 2) 清水⁵⁾のような、住まい方に注目したすぐれた研究もある。
- 3) 日本外務省ホームページ上のラオス人民共和国の一般事情に関するページが引用している、2006年世銀統計によるデータである。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/data.html>

- 4) ゆえに、現在でも黒タイ語で腋臭のことを「亀の糞の臭い (ai min khi tau)」と呼ぶ。
- 5) 2009年10月、北ラオスのルアンナムター県ナモーにある黒タイ村落で、サウ・ヘに亀の甲を模した木彫りが括り付けられているのを見た。

参考文献

- 1) 樫永真佐夫 2009『ベトナム黒タイの祖先祭祀一家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』風響社
- 2) 樫永真佐夫 2000「高床式木造家屋—トゥアンザオ県の黒タイ村落から」ベトナム協会編、『ベトナム』1999-3号, 16-32頁。
- 3) Cam Trong va Phan Huu Dat 1995 *Van hoa Thai Viet Nam*, Ha Noi: Nxb Van hoa dan toc, tr.45-54
- 4) 川島宙次 1989『稲作と高床の国—アジアの民家』相模書房、Nguyễn Khắc Tụng 1994 *Nhà ở cổ truyền các dân tộc Việt Nam*, Hà Nội: Hội khoa học lịch sử Việt Nam, Trung tâm nghiên cứu kiến trúc Đại học kiến trúc Hà Nội.
- 5) 清水郁郎 2005『家屋とひとの民族誌—北タイ山地民アカと住まいの相互構築史』(風響社)

Summary

The Tai Dam Houses Shaped Like Turtle Shells in Vietnam

Masao Kashinaga

National Museum of Ethnology

This paper is a report based on the fieldwork I have been conducting at a Tai Dam village in Northwestern Vietnam since 1997. With regard to this village, the written records of former ethnographers often mention that the houses of the village inhabitants were shaped like turtle shells (*huon tup cong*) in keeping with their ethnic traditional material culture. The purpose of this paper is to describe their traditional houses and to consider the change in their traditions as reflected by the architecture of these houses.

In this paper, I first describe the demolition, toward the end of the 90s decade, of the last of the traditional houses shaped like turtle shells. Thereafter, I shift my focus onto the construction of the new type of stilt houses (*huon tup dat*). Next, I demonstrate how the traditional Tai Dam houses have continuously undergone change in accordance with certain factors, such as alterations in the way of life of the villagers, in the architectural techniques they employed, in their external social and cultural influences, and in their access to building materials.